まだ田園地帯が広がっていた
大正11年当時の大崎

豊かな恵みの水に育まれてきた“水辺の郷土”大崎。

過去から現在、未来へと受け継がれていく「ふるさと大崎」のDNA（原風景）を訪ねる『大崎今昔物語』。
その第九話は、かって大崎は、海や川の恵みに育まれ、豊かな清流も暮らしの糧となって流れていた“水と緑の大地”だったという話。
太古の昔、目黒川が谷をつくって海に注ぐ地に、先人達が貝塚と共に残した縄文遺跡。
天然の清水で作った氷室や、品川用水が回した水車も、水辺の ユートピアでもあった大崎の原風景を形づくっていました。

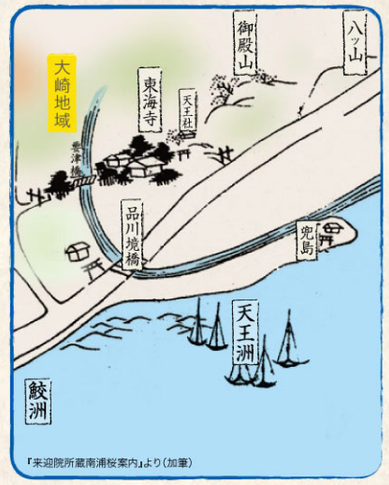
居木橋貝塚が証した〝海辺の地〟大崎。岬を形成した目黒川や、田園の豊かな湧水、さらに清流の品川用水に至るまで、大崎は水の恩恵に培われてきた〝水辺の里〟でした。

大崎が水と緑の里を形成できた要因の一つとされるのが、『品川用水』の存在。江戸時代、細川家の抱屋敷（戸越）の庭の泉水として流れていた玉川用水を、近隣の村が幕府に分水を願い出て1669年に開通させたものです。戸越村から桐ヶ谷村、さらに居木橋村（現大崎）方面へ至るこの清流は、昭和の中頃まで百反通りの脇を流れ、周囲の田園地帯を潤わせていました。

品川用水の清流を受けて回る水車が田畑のここかしこに。（※写真はイメージ）

大崎名物、豊かな湧き水で作る天然の氷。冬、氷室に貯蔵し、春や夏に都心へ向けて出荷していました。（※写真はイメージ）

居木神社脇の立て札が示す『居木橋遺跡』。周辺では5つの貝塚が確認され、また竪穴住居跡からはクジラの骨製の骨器や中仕切のある高台付鉢、さらに深鉢土器や耳飾りなども出土し、縄文時代前期の貴重な遺跡として大きな注目を集めました。（写真右・下）



『来迎院所蔵南浦桜案内』より（加筆）

江戸時代、東海道の第一宿として賑わいを見せた品川宿の海辺（東京湾・天王洲辺り）に注ぐ目黒川。当時の目黒川は品川境橋でカーブを描いて八ツ山方面へと流れ込んでいました。現在と違って大崎地域は海がすぐそばに迫る川口にあり、やがて水利の良さから目黒川河畔には海運を通じて近代産業の礎が築かれていくことになります。

原風景の中心を流れる目黒川。周囲には、のどかで生き生きとした里の暮らしが

今から3千年も前の東京湾を眺めれば、そこは目黒川を河口として陸地の奥深くまで海岸線が入り込み、大崎や品川の辺りは海に突き出た半島となっていました。郷土大崎の祖先達はこの頃から海（目黒川河口）で魚貝を採りながら生活していたとされ、現在の大崎2丁目周辺ではその名残りとなる『居木橋貝塚』も発掘されています。当時から目黒川に臨んで生活を営んでいた大崎の先人達。後の鎌倉時代にはさらに目黒川のまわりに水田を開き、その後、江戸時代には品川宿への食料基地ともなる田園地帯を形成して〝水辺の里〟の原風景を築いていったのでした。

目黒川はほぼ海だった太古の時代。貝塚が証す〝海の幸で生きた大崎先人〟

昭和28年とその後の63年以降、2回にわたる本格的な発掘調査で確認された『居木橋遺跡』（現・大崎2～3丁目辺り）。ここからはハマグリやアサリなどの貝塚と共に、竪穴住居跡や縄文土器、装飾品、さらに釣針なども発見され、縄文時代の祖先の暮らしの一端が明らかとなっています。海（川）や水田の恵みのもとに、営々として育んできた先人達の営み。それは近代化へ変貌を遂げる大正、昭和の時代に至っても変わることなく大崎の原風景の中に受け継がれていきます。

『おじいちゃん、おばあちゃんの昔話』が伝える水辺の里景色

大崎西口商店会発行の小冊子『おじいちゃん、おばあちゃんの昔話』によれば、大正～昭和初期の〝水辺の里〟大崎の生き生きとした景色を偲ぶことができます。（以下引用）

湧き水
私は大崎で生まれ、大崎で育ちました。家は農家で、お米の他にカボチャ、なす、トマト、すいかなどを栽培しました。（中略）うちの前にはきれいな水が湧いていてみんなが洗い物をしに来ました。野菜を洗いながらおばさん達がおしゃべりをして、静かな竹やぶのあたりがちょっと賑やかになります。私の祖父は湧き水にちなんで「清水さん」と呼ばれていました。（後略）（大崎二丁目 戸倉 ちゑさん・当時82歳）

天然の氷（氷室）
昔、この辺りでは一年中冷たい清水が湧いていました。こんこんと湧いた清水があふれて崖下へ落ちて滝をつくります。これを利用した水車小屋もあります。付近は雑木林、田んぼ、畑などのどかな田園風景です。ところでこの辺りでは天然の氷ができたんです。冬になるとレンガで作った囲いに冷たい清水を流しこみ、そこに寒い風が吹き付けると、カチン、カチンの大きな氷の固まりが出来ます。そして春になると冷凍用にでも使うのでしょうか、お百姓さんたちがこの氷をノコギリで切って運んでいきます。（西品川 田中 よしさん・太田 あきさん・当時79歳、78歳）

品川用水と水車
昭和10年に千葉から大崎にお嫁に来ました。私の家は「清水粉砕所」、機械で粉を作る仕事です。（中略）うちが工場になったのは、大正4年。電力を使い始めてからですが、その前は水車小屋だったそうです。品川用水の豊かな流れが水車を回し、米を挽くのです。米は近所のお百姓さんが持ってきたもので、うちで精米していきました。（後略）（大崎二丁目 清水 澤子さん・当時73歳）

水車
私の家のまわりは、畑や田んぼばかりでした。おかぼ、なす、きゅうり、かぼちゃなどを作っていた専業農家でした。戸越方面は八幡坂あたりまで、西品川三丁目も畑や田んぼです。（中略）農地ばかりでこれといった道もなく、水車がところどころにありました。戸越の方から流れてきた小川には、平和坂下のところに岡田水車があり、昔は穀物をついていました。（西品川二丁目 岸 芳信さん・当時83歳）

先達が語るこうした風景に、昔から豊かな里だった郷土大崎の姿を思い浮かべることができます。

■参考資料：品川区立品川歴史館資料 他